



2013 年 5月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 55

紅線編「滑稽俳句集」を読み解く 47 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 紙魚と生れ大言海を泳ぎゐる 八木健

会長には、この四年半余り、五十五回に亘ってインタビューをお願いしました。そのうち四十七回は、明治三十四年に佐藤紅線が出版した「滑稽俳句集」の読解を(なかには読解に苦しむ難解の句もありましたが)、当時の時代・風俗習慣・庶民の心を背景に、本当に解り易くご解説戴きまして有難うございました。初めて、この貴重な古書を見せて戴いた時には、会長のおっしゃる「読破」は到底無理だと思いました。会長に導かれて教えを受け、紙魚になっての楽しい書物の旅も今回で遂にゴールインです。

会長 > 四年半にもなりますか。滑稽俳句に余念がなかったですね。「石の上にも三年」と言うのに、「虚仮の一念岩をも通す」ですね。継続は力なり、警察は恐ろしい、馬鹿は死ななきゃ治らないでしょうね。

高橋 > 四年が余念、三年が一念、苔が虚仮、今日も好調な地口の滑り出しですね。それでは、本日は紅線「滑稽俳句集」の最後の部「冬詠物」のご解説と、初志貫徹、この書を読破されての会長ご自身がお感じになられた思いなど、お聞かせ戴ければと思います。それでは、「冬詠物」のご解説からお願い致します。と、申し上げましても、今回は、前書の書や繪の説明の様な句ばかりですので、ここでは原文通り列挙させて戴きます。

大黒賛

神の留守よく女房を守るべし 嵐雪

夜半几薫身まかりし事を江

戸の成美がかたへ申遣

おどろけやおどろくな此世のしぐれ 大江丸

鐘馗傘にて鬼をおさへて鬼

の手足ばかり見えたる圖に

顔みねばしんきしぐれの傘の下 也有

中山道

霜枯やおれを見かけて鐘叩く 一茶

このむらの人は猿なり冬木だち 蕪村

雪の降夜握ればあつき炭團哉 鬼貫

雪の柳の繪に

もし鶯の居るかも知らず雪の中 也有

雪に傘さして行く人の圖に

雪に傘梅尋にか酒屋へか 也有

遠山初雪といふ題をとりて

やねふきにとへばけさから山の雪 也有

僧達と夜更けて歸る途中の吟

風呂敷をかぶれば雪の達磨哉 五明

おのが姿にいふ

ひいき目に見てさへ寒きそぶりかな 一茶

碧梧桐痘を患ひたるに

寒からう痒からう人に逢たかろ 子規

画賛

火桶たどんを喰ふや夜毎に一つツツ 蕪村

画賛

守武の水漬おとす火桶かな 几董

みちのく行脚の頃

楯焚て義経殿をひいきかな 巢兆

福仿祿壽の繪に

うんと手をのばしてかぶる頭巾かな 也有

儒罵釋

老二人ひとり寒き坊主かな 紅綠

歳暮

惜めども寝たら起たら春である 鬼貫

短くてこそ浮む瀬もあれ

寒鴨や我足長くして寒し 五明

赤間關

生海鼠ともならで流石に平家なり 涼菟

人のこのわたを贈りしに

渾沌は死せて海鼠の子ありけり 鳴雪

ほこらの圖に題す

留守かやい封じこめたる狐ども 虚子

会長 > 「詠物」は連句風の随筆といったところでしょうか。

「神の留守よく女房を守る・・・」、理想的な旦那さんで、言うことはありません。

「おどろけやおどろくな・・・」、驚けとか驚くなとか言ってますが、「この世のしぐれ」としていますね。気象のほかに、世の中のことを「しぐれ」と感じたのでしょうか。

「顔みねばしんきしぐれ・・・」、「顔が見えないんじゃないよ」なんてこと言ってますね。

「霜枯やおれを見かけて・・・」、一茶は村人にひどい仕打ちをされていますね。

「このむらの人は猿なり・・・」、それを蕪村がうけて、村人は「猿」だと言ってますね。

「雪の降夜握ればあつき・・・」、たどんを握る？消えたと思ったのでしょうか。

「もし鶯の居るかも知らず・・・」、雪の中に、鶯がいるかも知れぬと言っていますね。

「雪に傘梅尋にか酒屋・・・」、雪の日に傘さして「早梅」を訪ねるという図でしょうか。

「やねふきにとへばけさ・・・」、高いところで仕事しているから遠山が良く見えるということですね。

「風呂敷をかぶれば雪の・・・」、風呂敷を被っておどけて、白達磨などと言ったのでしょうか。

「ひいき目に見てさへ寒き・・・」、寒さに耐えている自身を詠んだ句ですが、「どう見ても寒そう」ということですね。

「寒からう痒かろ人に逢・・・」、疱瘡を患うと面会謝絶。隔離されてしまうから「人に逢いたい」だろうと言うわけですね。

「火桶たどんを喰ふや夜・・・」、一晩に一つ「たどん」を使ったのですね。庶民の暮らしが分かります。

「守武の水漬おとす火桶・・・」、水漬を本当に落としたのか。守武と几董は時代が異なりますから、守武の句に出てくる水漬を受けて詠んだのでしょうか。

「楳焚て義経殿をひいき・・・」、囲炉裏噺でしょう。「みちのく」は判官鼻頂ですから。楳を焚ては自慢したのですね。

「うんと手をのばして・・・」、福寿の頭は上に長く伸びていますから、そうなりますね。

「老二人ひとり寒き・・・」、老人のひとは作者、ひとは坊さんですね。その坊さんは、寒そうにしている。乞食坊主かもしれません。

「惜めども寝たら起たら・・・」、「年惜しむ」の句ですね。惜しんでも一晩寝て起きれば、新年だと思つづく思うわけです。

「寒鴨や我足長くして・・・」、鴨の足は短いですね。人間は長いから寒いということですね。鴨の絵を見てそのように思ってるということです。

「生海鼠ともならで流石に・・・」、壇ノ浦で滅亡した平家は、平家蟹になりました。海鼠にはならなかったのは、流石だと言っています。

「渾沌は死せて海鼠の子・・・」、「このわた」は海鼠の加工品ですね。海鼠は死んで、このわたを残したと言っています。

「留守かやい封じこめた・・・」、「ほこら」は暗いから良く見えない。中に狐がいるものとみて呼び掛けています。

高橋 > 本当に有難うございました。一〇七年前の紅緑の「滑稽俳句集」の世界に楽しくお導き戴き、四年かけて、ここにめでたく終了です。振り返ってみますと、『紅緑の滑稽俳句論』というべきものと教えて戴いた「自序」の項には紅緑の滑稽に対する思いが本当に上手く纏められていた様ですね。(インタビュー⑨・「紅緑編Ⅰ」)それに、会長の脱線のお話や地口の笑いの中にも、大切な滑稽句の基本の教訓あったり、面白くて素敵な解説の中に当時の習慣・風習が偲ばれたり、本当に期待通り、とても良い勉強になりました。

会長 > 紅碌編の滑稽俳句集を読破して分かったことは、滑稽は日常の生活の中にありということです。それを見つけるのは意外に簡単。女房が旦那の浮気の証拠を掴む程度ですねえ。それは冗談。今、私たちは「俳句に失われた滑稽を取り戻す」ために活動していますが、作った作品は後世に残るのです。

紅碌が「滑稽俳句集」を編んでから百年後に、私達が読み解いたように、滑稽俳句協会員の作品集を、これから百年後に読み解いてくれるかも知れません。虚仮の一念で、滑稽俳句を詠み続けましょう。まあ一年で十分でしょう。苔の一年。

高橋 > 百年後にそうなると思えば、「虚仮の一念」力がわいて来るような気がします。「温故知新」のもとに、このような貴重な古書を面白く、分かり易くご解説下さった会長には本当に感謝の言葉もございませんが……。この四年半余りの「会長へのインタビュー」は、私にとりましても、笑いの内に学習出来る本当に楽しい時間でした。

会長 > 私も、高橋さんのメールを開くのが楽しみでした。「会長の快調となるご開帳」でしたね。

高橋 > ふふふ！最後まで、素敵な地口ですね。ところで、このインタビューを毎月読んで下さった協会員の皆様方には、心より感謝しております。「紅緑の滑稽」を「平成の滑稽」と比較して下さい、今後の学習にお役立て戴ければ、会長の面白くて素晴らしい能力も、拙い私の努力も無駄ではなかったと、喜びに堪えません。お名残りは尽きませんが、最後に「今後の予定」とご好評の「虎造節」で、「最後のインタビュー」を、会長にお締め戴きたいと思います。本当に有難うございました。

会長 > ♪丁度時間となりましたあああ
また来月から別バージョンの
「滑稽修行」と参りますううう ご期待下さい 高橋素子の筆の冴えええええ♪